

## 高松アーティスト・イン・レジデンス 2024

### アーティスト・トーク「高松で制作中のあれこれ」

日時：2024年11月30日（土）15時～16時30分

場所：高松市美術館 講堂

出演：岩本象一、西村涼、メランカオリ（いずれも高松アーティスト・イン・レジデンス 2024 参加アーティスト）

司会：橘美貴（高松市文化芸術振興課 学芸員）

#### ●岩本 象一



皆さんこんにちは、岩本象一といいます。音楽家として活動しています。まだ滞在は2週間足らずですけども、2週間、どんなことをしてきたかをお伝えしようと思います。その前に、僕自身がどのような人間で、どういうことをしてきたのかをお伝えすると、本レジデンスで何をしようとしているのかがイメージしやすくなると思いますので、まず経歴からお話ししたいと思います。

僕は兵庫県神戸市に生まれ育ち、母がピアノの先生だったので音楽に親しんで育ちました。親や親戚が変わった職業の方が多くて、父が哲学、叔父が抽象画家で、もう一人の叔父がアイリッシュ音楽の演奏家、叔母が染色家、いとこがイラストレーター、シンガーソングライター、映画関係の仕事をしています。小さい頃から、何しているんやろうという人たちに囲まれて育ちました。それがロールモデルになっているかもしれません。

中学校まで野球をやっていましたが、野球のバッドがいつの間にかドラムのスティックに替わり、いつの間にかドラムを始めることになりました。現在までいろんなジャンルのドラムをやっています。20代の頃にドラムをやっていて、このままでいいのかと考えていた時に、アイリッシュ音楽をしている叔父に話を聞かせてもらって、世界にはいろんな音楽があって、ガムランという音楽があることを教えてもらいました。

たまたま神戸でガムランのワークショップがあったので、参加して、ものすごく衝撃を受けました。インドネシアの伝統音楽のガムランは、打楽器で構成されている音楽です。鉄琴や木琴、ドラや太鼓、歌もありますし、笛もあります。弦楽器もあります。そういう音楽のワークショップを神戸で受けた時に、これは現地で勉強したいなと思いました。インドネシア政府の国費留学制度に運よく受かりまして、僕はジャワ島で音楽を3年ほど勉強しました。帰ってきて、ご縁があって岡山でガムラン教室をやって今15年目くらいです。ガムラン以外の楽器もやっています、基本的には打楽器をメインにしていますが、たとえば、高松市障がい者アートリンク事業、11年くらい続いている事業に初年度から参加しています。なので高松には毎月通ってしまっていて、作業所でガムランとかそれ以外の楽器を持って行って、皆で作詞作曲をして活動しています。

それ以外にレジデンスですと、笠岡諸島って聞いたことありますか？岡山県のちょっと広島県寄りにある島なんですけど。北木島という石材の島であったり、その近くの白石島という島に滞在し

て制作したこともあります。その時は島の方、子供やおじいちゃん、おばあちゃんとかと一緒に影絵を作ったり、コンテンポラリーダンスの方と一緒に作品を作ったりしました。北木島は石材の島なので、石工さんに石で楽器を作ってもらって合奏をして、音楽劇のようなことをしたこともあります。

今回のアーティスト・イン・レジデンスで、書類を出す時に、今までの活動を振り返って、かつ、これからどうしたいかを総括的に書けるなと思いました。なぜ僕が打楽器にこだわっているのかと考えると、姉は全く耳が聞こえないんですけど、小さい頃、太鼓をたたいた時にぱっと振り返ったんです。その記憶が蘇りました。音を、空気の振動ですね、それを響かせることが、僕が一番大事にしている表現方法で人と繋がるツールだということを大人になって初めて気づかされました。それをステイトメントに書きました。

なので、僕は打楽器がメインで、今回も主に打楽器で作品を作ろうと考えています。

今回2週間足らずの滞在でしたけども、高松市といっても広いので、どこで滞在するかと考えたときに、牟礼に滞在したいと前から考えていたので、庵治と牟礼に滞在しようということで、地域の文化や歴史を調べていきました。まずは図書館にこもって、庵治町史、牟礼町史みたいなものを読みながら、歴史文化を調べていました。そのなかで、びびっと来たのが、庵礼西国33観音という、お遍路さんみたいなものがあるんですね。庵治と牟礼で33カ所の観音さまを巡る、総距離32キロくらいのもので、それを巡ってみよう。今は志半ばですが、17カ所まで行きました。お遍路さんみたいに分かりやすい場所にはなくて、探さないといけないんです。17カ所、今回行ったなかには、見つからないところもありました。地図をたよりに、近所の人に聞いたりしながら巡っていったんです。巡る時に一番印象的だったのが、皆さん、指差し道しるべって分かりますか？僕は初めて知りました。神戸にはあまりないと思うのですが、この道しるべが印象的だった。指さす方向に導かれるような。この導きというのが別の事で繋がる場所もあり今回僕のなかでキーワードのひとつとなりました。そうして33カ所巡る活動をしつつ、企画書にも書いたんですけども、石を使って、もしくは石の楽器を使って町の人たち、この高松周辺に住まう人たち、もちろん国籍をこえて、その人たちと一つのパフォーマンスをしたいというのが最初からあったので、それに向けて動き出しています。

まずは石屋さんを探すために商工会に行きました。どこの石屋さんに聞けばいいですかと聞いて紹介してもらいました。そして昨日、石を提供してくださる石屋さんを見つけました。そのなかで、石で中国の二胡という楽器を作っている石工さんがいまして、その方も公演に出してくれるということで、その人も巻き込んで何かやろうということで、約束してきました。

また、高松ってインドネシア人の方が多いんですが、坂出のほうに最近モスクができて、そこに行ってきました。インドネシアのムスリムコミュニティの方と知り合いになりまして、ムスリムも特徴的な音楽があるんですが、ぜひこの方々とも一緒にできたらいいなと思ひまして。一緒に出てくださることになりました。

地域の人、石工さん、今後予定しているワークショップの参加者の人たち、そして高松に住んでいるインドネシア人の方々、あと香川にゆかりのあるアーティスト、ダンサーの方やミュージシャンの方たちにも声をかけています。場所は、やしまーるを考えています。やしまーるって形が変わ

っているんですが、回廊のような、巡るような形でパフォーマンスができないかなと考えています。まずはワークショップの前に、文化交流会みたいなものをしておいたほうがいいかなと考えていて、インドネシアの方とアートリンクの施設のメンバーの人たち、その周りの人たちと1月に文化交流会みたいなかたちで催しをしようと思っています。それからワークショップをして、どんどん中身を作っていこうかと考えています。

音楽学者の小泉文夫さんが、文字を持たない民族がいても、歌を持たない民族はいないと言われていました。人は歌い踊ることで心を響かせ反響しあって生きてきたということです。哲学者の鈴木亨さんは、それを響存と言われていました。そういう文化、宗教、言葉を越えたところで響き、今回は石ですが、主に石を使って響きあえるようなパフォーマンスができればと考えて、現在動いております。

今回は、たまたま庵治石の瓦をもらってきたんです。やしまーるの屋根って全部庵治石の瓦らしいんですけど、そのストックを1枚もらってきたので、ちょっと鳴らしてみてもいいでしょうか。(実演。画像1)



画像1

ありがとうございました。

## ●西村涼



西村涼です。よろしくお願いします。僕は普段、銅版画の技法を使って、版画の作品を作っています。今回も高松に滞在して、自分が普段使っている技法を用いながら、高松のいろんなことをリサーチしながら作品を作ろうと思っています。

1回目、9月の頭から2週間ほど滞在していたんですけど、その時はリサーチのためだけに来ていて、いろんなところに出かけました。僕は普段水辺の風景とか、川の水の流れとか、森や草木が生えている森林とか、植物が成長したり枯れていく草むらとかをモチーフとして作品を作っています。最初は生や死に興味を持ち始めて、学生の時から制作をしていたんですけど、広い範囲からもう少し狭い範囲でものを考えていきたくて、自然の流れや時間の経過、自然界の流動性とか、そういうものに興味をもって制作をしています。

今回も高松のレジデンスに応募するときに、地図を見ていたんですけど、海や川、山も多くて自然が豊かだし、僕が好きそうなものがいっぱいあるなというのが、最初のきっかけでした。そういう景色が見れる所に行って、スケッチを描いたり、水に関する伝記や昔話があるのかなと思って郷土館や図書館で調べていました。

最初に地図上で、池がめっちゃ多いなと思っていました。そして、歴史資料館に行って、高松に関する昔話をみていると、水に関する昔話多いなと思って。たとえば水不足や雨ごいの儀式に関する話、主に水不足の話が多くて。調べていくうちに、そういう理由でため池が多いんだなと感じたのと、いろんなところに足を運んで、そのことが地形からも分かってきて、それをもとに作品を作ってみようかなとぼんやりと考え始めました。

その時に、竹清にうどんを食べに行っていたんですけど、その向い側に香川用水資料館という資料館があって、何気なく見てみました。徳島を流れている吉野川から地下に大きな水路を掘って、水不足の高松のために、そこから飲料水や田畑のためのため池の水を一定の水量保つために水を引いてきていることを知りました。地下に、生き物の脈のように水の流れがあることを知って、人工的にそういう流れを作って、ひっばってきているのが、聞いたことがないし、純粹におもしろいなと思って、それに関した作品を作っていこうと思って、ため池とか河川とか、川と海の境目の所に行って、作品を作ろうと思いました。

今は2回目の滞在をしているんですけど、主に今回は自分の作品を作っているのと、今話した水の脈みたいな流れでワークショップをしています。用水路に関係する場所、ため池や川に行って、いろんな人に僕が普段やっている技法と同じように、道具を使って小さい版画作品を制作してもらっています。いろんな場所、5カ所でやります。最後は2月に高松市美術館の市民ギャラリーで成果発表展をやるんですけど、そのひとつの壁面に地図みたいに作品を一堂に並べます。ワークショップでもあるんですけど、ひとつの大きな作品を共同制作したくて、土日はワークショップを中心に活動をしています。

これ（画像2）が最初の三郎池で版画の作品を作ってもらっているところです。僕はドライポイントという技法を使っています。この技法は、版を直接、針や工具で引っかいて、傷ついた線のと

ころにインクを詰めて、紙とかに転写して、引っかいた表情がそのままイメージになるというやり方です。僕は銅の板ではなく、プラスチックの板を使っていて、プラスチックの板を池とか川、外に直接持って行って、風景にかざして写し取るような感じで、彫ってもらっています。

なので、版を彫るときには外に持って行って、皆で池の周りを散歩して、どこで彫るかというのを、参加してもらう人それぞれの目線で見つけてもらっています。ワークショップが「水の脈をとどめる」というテーマなので、水をどこかには描いてほしいとだけ条件をつけて彫ってもらっています。

版が彫り終わったら、スタジオに持って帰って、作品を作ります。本来なら、銅版画は紙に転写する技法なんですけど、その場合プレス機っていう特別な機械が必要で、その機械に版と紙を通して圧力をかけることで、紙にインクを転写させて作品を作ります。ここの美術館の講座室には銅版画のプレス機があったので、ここでなら紙に転写する作品が作れるんですけど、せっかくだらんな場所に出かけて、わざわざここに持って帰って作るのも、高松での滞在制作では、あまりしたくないなと思いました。

僕が普段作っている作品の技法で、四角形の型を作って、そこに石膏を流し込んで、インクを詰めた版の面を石膏にぽちんとつける方法があります。石膏って最初は液体状でとろとろしているんですけど、時間がたつと、水分が抜けて硬化して、石のような質感になります。硬化するタイミングで、版に詰まっているインクを吸い取って、表面に定着させる効果があるので、ワークショップでもその方法で作品を作ってもらいます。これ（画像3）が2回目の奈良須池でのワークショップで、同じように風景を切り取ってもらって、この時は美術館の講座室に帰ってきて、石膏の流し込みをしたんですけど。こういった感じで小作品を、共同制作の作品として、今制作している段階です。



画像2



画像3

これらとは別で、僕が自分でもメインの作品を作っていて、それらを2月の成果発表展の時に一緒に展示できればいいなと思っています。

それに関連して、青森県にある国際芸術センター青森という滞在制作をするための施設があります。去年僕はそこで滞在制作をして、ワークショップもして、展覧会もしました。国際芸術センター青森という場所は、すごく立派な銅版画の工房があるんですよ。大きいプレス機があって、紙に転写ができる、でかい作品も作れる。僕は行きたいと思って行ったんですけど。この時は大きいプレス機があって、皆で一緒にでっかい版に同時に版を彫ってもらって、それを工房に持って帰って大きいプレス機で刷るというワークショップをしました。青森の土地が広大で、普段住んでいる京

都の、普段見て描いているモチーフとかのスケール感とは全然違って、その青森のスケール感に合った作品を作りたくて、大きい作品を彫って作ることにしました。敷地内にある森林に版を立てかけられる台を持って行って、彫って、今回とは別の作り方をしています。銅版画のインクを詰めて皆でプレス機で刷るワークショップでした。

この時はこの内容でよかったんですけど、ひとつ心残りとして、青森では、施設を知っている、銅版画の工房があることを知っている人が参加してくれました。要するに銅版画の技法とか、内容に興味をもった人が来てくれて作ったので、専門的に慣れている人とか、もともと工具を使うことに興味がある人たちが集まってきて、作品を作りました。滞在制作をするうえで、僕が外に出て周りの環境とか、そこに住んでいる人たちと関われる機会が少なかったのが、個人的に心残りだったので、次にもしこういう作品を作るワークショップをするなら、専門的な工房がない場所に行って、共同制作で、作品を作りたいなと思ったので、今回のワークショップと滞在制作の内容になりました。

## ●メランカオリ



メランカオリといいます。私は普段茨城県を主な拠点として活動しています。普段は占いですね。主に星の動きですとか、土地由来、その土地に根付いたもの、そこで出会った情報を頼りに、その場で、そのタイミングでどういうことを占っていくかを占って、制作をしてきました。普段は予備校で古文の講師とか、地球儀の加工の仕事をしながら暮らしています。

今回、高松のアーティスト・イン・レジデンスへの応募の段階では、「松」「待つ」という掛詞、昔から和歌とかで詠まれていた掛詞という、何かと何かを掛けて、情報を重ねる掛詞ですね。「松」と「待つ」を掛けて何かできるのではないだろうかというのを思いつきました。松の下で待っていたら何かあるんじゃないかなという思いから応募しました。

そのなかで特に考えたのが、高松という名前でもある、高い松、背が高い松の下で何かすると、そこで不思議な経験があるようなことが古文でもよくある話でして、有名どころだと枕草子に「松の木立高きところ」という話があります。物の怪に憑かれた人と祈祷師と霊媒が、松の下で理想的な治療を行うというのがあって、私はその話にシンパシーを感じていて、松の下で待っていたらいいことがあるんじゃないかと思っています。普段の制作態度としても、主体的に何かをするというよりは、いつも、展示をする場所や呼ばれた場所に行って、占いとかをする過程で自然と繋がって、言葉や形になって作品を作ってきたので、高松という地名から何かいいことがあるんじゃないかなと思って訪れました。

私は今が2回目の滞在なんですけど、気になっていることとして、先月滞在したときに松の日本庭園ですね。昔から関心があったセラピーとかに結び付けて、庭園や庭を作るということと、美術におけるインスタレーションという空間を作るということと、自分が普段ライフワークとしている占いという共通項から、世話をする作品、作品が生まれて、それを手入れしたり、世話をしたりとか。ただ作品を置きましたというだけじゃなくて、作品の過程を大事にした展示を考えたいなと思っています。

いつも私がモットーにしている、「流れ星みたく見えたらラッキーだが、見えないからといってアンラッキーというわけでもないような作品」を普段から作りたいなと思っています。

高松での滞在中の様子を少しだけ紹介したいと思います。

具体的に高松に訪れて、まずしたことと言いますと、先月、10日ほど1回目の滞在をしたのですが、その間、宿泊先と出かけた先で制作をしていました。特に好んで訪れた場所が高松の港のフェリーの待合室付近だったりとか、船がやってくる場所です。そこで椅子に座りながら考え事したり、作品を制作していたんですけど、ちょうど足元にこんなものがありました（画像4）。これが何かは謎なんですけど。円に対して十二分割されているんです。これが占星術で用いられる通称ホロスコープと呼ばれるような、星座のもので、それとぴったりで、私はこれを見た瞬間に、ここで占いができると思いました。ここを訪れた数日後のちょうど蠍座新月の日、新月の日は何か計画をたてるのに良いとされているんですけど、蠍座新月の日に何か起きるといのは分かっ

て、占いをしました。これはどういう占いかといいますと、去年から私が行っているラッコ占いというものです。ラッコの知性を頼りに占う占いですが、とある方から授けられた貝殻をラッコみたいなたたいて占うのをずっとやっています。真ん中にあるボタンは、高松に来て初日に訪れたライオン通りの素敵なボタン屋さんの方にいただいたボタンです。「これ1個しかないからあげる」と言われて、すごく素敵だなと思って、このボタンを使って蠍座新月の日に占ったんですよ。後から思い出したんですけど、この貝殻は友達からもらったもので、香川の志々島の貝殻でした。この貝殻も実は香川から来ていたことに気づきました。こういう感じで占ったんです。ここにちょうどホロスコープがあって、船がきていて（画像5）。鳩がずっと集まってきて。その時に占った内容が、松と尻尾という。尻尾に何かあるんだということが出まして。ちょうどその翌日に、松と尻尾にゆかりのある名前の方に会いまして、栗林公園を案内していただきました。



画像4



画像5

私は栗林公園に訪れた時にですね。ぼたん石と見返り獅子という石があるんですけど、振り返った獅子に似たような石と、花のような石が距離をとってあります。獅子身中の虫は、牡丹の夜露で死ぬという、獅子にとって古来から牡丹は安寧の地であったということ、その時知ったんですが、これ見てください（画像4中央）。獅子と志々島、牡丹とボタンが掛かっていることに気づいたんです。ライオン通りでいただいたボタンと見返り獅子とぼたん石というものが掛かっていた。それですごい繋がったんです。こういうことになっていたんだと後からの発見もあって。その時の占いにもとづいて、何を作ろうかと考えています。

雨の日に盆栽園を訪れました。土砂降りのなか1万本くらいある盆栽を端から端まで見ました。修行みたいな日でした。その後、自作の占い道具を作ってみたりしました。普段はタロットカードを自作しているんですけど。栗林公園で、枝越しに景色を見た時に、その経験が占いっぽいなと思いました。占いの手相を見ることとか、ホロスコープや何か越しに線を見ること、庭を見ること、自分のなかで重なったので、そういう重なることを前提としたタロットを自作してホテルで占いをしたりしていました。夜になると町に繰り出して、松の下で占いをしていました。

ちょうど滞在先の前にラッコのタイルがありまして。見た瞬間、「あ、滞在先を見守っているラッコがいる」と。それも繋がって。ラッコのもとで繋がっている。

キーワードとして挙げていた獅子ですね。たまたま商店街で猫と出会って名前をきいたところ、レオ君ということで。また、信号待ちをしているときに、横を向いたら電光掲示板に「応援します」というメッセージが映って。ここでよく信号待ちになることが多かったんですけど、待つ度にその画面になるのですごく応援されているなと思ったり。

あとは国分寺と鬼無の盆栽園ですね。インタビューさせていただいて。松は鉢合わせが大事なんだよ、鉢に合わせる作業が大事なんだよと、見せていただきました。高松で猫と出会うことが多かったです。

私は主に占いをしながら出くわしたものの、気になったことをもとに、それが後から何かに対応して、どういう意味だったのか読み取って作品にしていくスタイルでやっています。

昨日、橘さんが鳥取、因幡の話、岩美の話を岩本さんとしていたじゃないですか。その帰りに何かあるのかもと思って、猫の話と昨日あった出来事を振り返ったときに、とても有名な、百人一首にも含まれている在原行平の詠んだ「たち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今 帰りに来む」という和歌があるんですけど、これは行平が因幡に赴任する時に詠んだ歌なんですけど、松の下で待っている人がいるならすぐ帰ってくるよという歌です。その、「まつとしきかば」のおまじないというものがあるそうで、岡山出身の内田百聞がよくやっていた、飼い猫がいなくなっちゃったときに、この和歌を餌の下に置いておくと、猫が戻ってくるというものがあるそうです。松に関わるおまじないとしてよく知られるもので、もともとは因幡に起源があるそうです。自分のなかで、行方不明になる猫の話と因幡の話、松の和歌が繋がって、何か「まつとしきかば」のおまじないみたいな。そういうところも繋がったなと思いながら、高松での不思議な経験をもとに、何を作ったらいいかというのを考えています。今月は、昨日（11月29日）から12月9日まで2回目の滞在があって、その間に大きな天体のイベントもありますので、何か具体的な作品、滞在制作も12月2日以降で制作できればと考えております。

## ●インタビュー



橘) まずは、高松アーティスト・イン・レジデンスに応募しようと思ったきっかけについて教えてください。

岩本) まず知ったきっかけから申しますと、讃岐市在住のダンサーの方とよく一緒にパフォーマンスしているんですけど、その方が教えてくれたのがきっかけです。高松に月に2回来ているので、これはぜひ応募してみたいなど。最初から牟礼、庵治のあたりに興味がありましたし、これはと思って応募しました。牟礼と庵治のこと、歴史のこととか調べたかったので、これは絶対良い機会だなと思って応募した次第です。

西村) さっき説明したなかにもあったんですけど、青森の滞在制作の時より開けた環境でいろんな人に作品を作ることを体験してもらいたいというのがあって、そのためには工房がなくてもいいなというのがひとつの理由としてありました。高松のレジデンスには専門的な工房や施設が基本的にはないというのが、僕が今やりたいことに対してよいなと思ったのがあって。

もうひとつ、僕の技法って直接プラスチックの板を引っかくんですけど、引っかく、傷をつけることでイメージを作るというのを、僕自身の作品で大事にしています。人が最初に、多分、壁画とかのように壁を引っかいて傷を作って、動物の形を描いたりすることが、イメージを膨らます方法として、人が原始的にイメージを描きだす、ひとつの作り方として大事にしている部分があると思っています。何もない場所で一からイメージを作り出すみたいなことを、僕自身も、ワークショップに参加してもらう人にも再体験してもらいたい、感じてもらうことができればいいなと思って、高松のレジデンスに応募しました。

橘) 西村さんは、施設が整っていないであろう高松をあえて選んだと。ただ、結果的にはプレス機があったので、それを使おうという流れになっていますけど、専門的な知識や興味がない方にも来てもらいたいという当初の目的は果たせそうですか？

西村) 今は、ワークショップを何カ所かで行ってきました。場所によるんですけど、これまでは、美術にすごい興味がある人とか、銅版画を学んでいて、技法を知りたいから来ましたという玄人や慣れた人がすごく多かったんです。僕が教えることは何もないなみたいな、僕は見るだけだなと

いうことが多かったんですけど。青森しかり。今回の1回目のワークショップではお子さんも参加してくれて、工具を触ってみたりしてくれました。電動の工具とか、ハンダっていう熱が出る道具とかでプラスチックの板を溶かしたりもするので、工具を触るのが大丈夫かなと心配したんですけど、意外と興味津々ですらすらっと版を彫ったりしてくれていて、ばかにしたらだめだなと改めて思ったりして。それも結構嬉しかったです。今回は、年代も幅広そうで、いろんな人に参加してもらっているんじゃないかなと実感しています。

橘) メランさんにも、高松を選んだ理由や、そもそもなぜアーティスト・イン・レジデンスに参加しようと思ったのかを伺えたらと思います。

メラン) 私は普段から外で制作することが多いので。今までの経験としては、和歌山が多かったですね。去年は神奈川の湘南、出身がそこらへんですけれど、藤沢市のレジデンスに参加しました。静岡も参加したことがあります。気づいたら参加してきたレジデンスは全部太平洋側で、線で繋いでいくと四国のほうに伸びるのは、自然発生的にありえるのかなと思います。

ただ、高松のレジデンスを知ったのは偶然で。自分は美術情報に疎い方なんですけれど、たまたま仕事の待ち時間にメールが届いたんです。それはお知らせみたいな感じで。もともと知り合いだったキュレーターの方のメーリングリストみたいなもので。今こういう展示がやっているよというふうに月ごとに送られてくるメーリスなんですけれど、その最後のおまけみたいところで、高松のことを教えてもらいました。それを見た瞬間に直感的に、あっと思っ。期限ぎりぎりだったんですけど、その場でフォームに入力できるものだったので、打ち込んでエントリーした次第です。その時は直感的だったんですけど、後から気付いたのは、さっきの貝殻の話もそうなんですけれど、去年くらいから香川とのゆかりが実はあったんだというのを知ることがありました。後から今ちょっとずつ気づいています。

橘) 高松で活動をするなかで、高松に対して印象が変わったことや、新しい出会いなどがあれば、伺えたらと思います。岩本さんは今まで高松に何回も通ったうえで、長期滞在していらっしゃるんですが、印象が変わったようなところはあったでしょうか？

岩本) はい、今回、高松といっても全部は回れていないんですけど。今までは日帰りの形腰で、をすえて、長期で滞在するということが今までしたことがなかったです。住むと全然違うなと思いました。今回、いろんな方を巻き込んで一緒にパフォーマンスをしようとしていて、いろんな方とお話をして、ある人にお話したら、じゃあこの人紹介するよ、次はこの人紹介するよという感じで、今まで出会ったことのない方とたくさん出会いました。さきほどお話した、巡礼の旅でもいろいろな人に助けってもらって。あっちにあるよとか。まあ、そっけなく「知らん」と言われて傷ついたこともありましたけど。いろんな人と会話して、対話して、今まで知らなかった牟礼と庵治の歴史もですけど、今そこにどんな人たちが住んでいるのかということを感じることも少しできたかなと思っています。

橘) いろんな地元の方との出会いが、ゆくゆくはワークショップやパフォーマンスにも関係してくるのかと思うのですが、公演自体も高松の特色を汲んだ内容になりそうですか？

岩本) そうですね。庵治の石。その地域でとれた石を地域の石工さんに加工してもらう予定なんですけど。それを使って、かつ、その地域に住まう人たちとやるので、高松でしかできないだろうし。やしまーるで今回公演することになったんですけど、あの建物の構造がすごくおもしろい。複雑な、蛇みたいな形なので、あの形をしっかりと生かした、全部を使い切ってみるような内容にしようと思っています。その時、その場でしか上演できないような公演になると思っています。

橘) 西村さんは、これまで高松に来られたことはありましたか？

西村) いや、今回初めてです。僕は京都出身で、大学も京都の大学に通って、今も京都に住んでいます。2年くらい前まで、一度も制作や仕事で京都から出たことなく。僕がモチーフやテーマにしていることが、とても身近にある自然のものなので、レジデンスは自分にとっては必要じゃないなと正直思っていました。そう思っていたんですけど、一度、アメリカに個展をしに行った時に、僕が外で彫っている制作風景を見て、ギャラリーのオーナーさんが、こっちでやったらすごくいいものができると思うから来てほしいと言われて。それが向こうに初めて滞在制作をしに行ったきっかけでした。外で描くだけやし別に変わらんやろなと思っていったら、環境が全然違って。灼熱すぎて外にいてられないとか、すごいしんどかったり、最低限必要な線だけを早く描いて帰ろうとかしていると、緊張感でむちゃくちゃいい線が引けました。スケール感とか、環境が変わるだけで物が変わるな、作るものが変わるなというのがあって。それで、去年くらいから日本各地でレジデンスに応募していました。

高松は、住んでみると、青森とはスケール感がまた違った環境に感じました。京都市に住んでいると海がすごい遠くて、海を見たことがあまりなくて、青森だと施設から海まで行くのに車で1時間くらい。海を見たい時じゃないと行かない感じなんですけど、高松だと、滞在している所から歩いて15分くらいで海に行けます。それぞれのため池までも、行こうと思えば結構簡単に行けて。僕はフットワークが重いほうなんですけど、行けるなと思いました。いろんなものが身近に感じられて、ちょっと歩いたり、ちょっと電車に乗って離れるだけで生活環境や風景ががらりと変わるスケール感、小さい規模の中にいっぱい風景があるのがおもしろいなと思いました。

橘) メランさんも10月に初めて高松に来られたんですよね？

メラン) 初めてでした。事前のイメージがあったわけではなく、突然来たという感じなんですけど。まず感じたのは、商店街に初めて行ったら、自分の人生の記憶が再構成されていく感じがしました。東京の高円寺で見た油そばの店や、高円寺にしかないと思いでいたおしゃれなドーナツ

ツ屋さんが高松にもあるとか。この前訪れた場所、島根県、自分が育った町、神奈川の平塚なんですけど、平塚の商店街を彷彿としたりとか。好きでよく訪れている広島の実にあるお店の一角を思い出したりとか。自分の記憶にリンクするような、記憶の再構成がされていくような印象を受けました。初めて訪れたはずなんですけど、訴えかけてくるようなものが風景のなかであって。それがさりげない訴えかけ方で、自分にはそれが心地よい感じでした。すごい、不思議な体験をして歩いていました。とにかく楽しいです。歩いて。発見がめちゃくちゃ多くて。

橘) メランさんの場合は、最終的にどういうものが出来上がるか、まだ見えていないので、いろんな発見が今後醸成されて作品になるのかなと思っています。

メラン) 滞在制作だと、どうなるか分からないことが度々あります。いつも展示期間や会期が迫るにつれて、どうしようという気持ちになります。自分の時間と展覧会の時間がどうも違うみたいで、苦しむことがあるんですけど。高松の場合は、自分で交渉したりとか。自分の持っている占いの時間と、制作の時間が重なっているような気がしていて、それがスリリングでもあって、楽しんでいます。

橘) 岩本さんは西村さんのワークショップに参加してくださいました。普段あのような制作はされていないと思うのですが、感想などあれば伺えますか？

岩本) めっちゃ楽しかったです。いい時間過ごせたなと思います。是非皆さんやってみてください。ああいう海沿いとか、歩くだけでも気持ちいいんですけど、プラスチックの版をかざして見ることってまずしないですね。無目的にそうやっていたら変な人だと思われるし、でも目的をもって自信をもって橘のたもとで描いていました。ああいうのって、素朴な質問ですけど、個人的にできるものですか？趣味でできるものですか？たとえば僕が初めようかなと思ったら簡単にできるものですか？

西村) そうですね。銅版画の技法を用いるんですけど。今回のワークショップでは、版画用のニードルっていう針を使ったり、僕が普段使っている電動のルーターという回転する道具とか、ハンダゴテとか特殊な工具を使ってやっているんですけど、僕が大学の授業でこの技法を習った時は、先生が釘を研いでニードルを自分で作ろう、木に釘をさして、先端をもう少しだけ研いで、手製のニードルを作ろうというような授業がありました。版に傷がつけばどんな道具でもいいので、僕もたまに彫りの研究のために百均やホームセンターに行って、いい道具ないかなと探すことがあります。そういったもので彫りができます。今回は石膏に型取りして作品を作るやり方でやっていて、石膏や木材は簡単に買えるんですけど、装置を作るのはちょっと大変なところがあります。他に僕が使う技法でいうと、転写ができればなんでもいいので、紙粘土をぎゅっと押し当てて、紙粘土が水分を蒸発させる時に表面についている油分を吸うので、インクが転写されます。他にも転写の方

法もいろいろあって、フロッタージュっていう、鉛筆でマンホールに当てた紙をこすったりする方法とかでも、版に凹凸がついていたら、線やイメージが、鉛筆で出てきたりします。そういう本当にシンプルな構造だったら、もっと簡単にこんな表情も作れるんだという感じで楽しんでもらえるかなと思います。なので今回は、彫ってってもらった版も最後の展示が終わったら作品と一緒に返却します。また使ってもらえたら嬉しいなと思います。

岩本) 僕のなかでちょっと新しい世界が開けた気がしました。メランさんの規制線のこととか、皆さんにお伝えしたらどうですか？メランさんのアーティスト写真(画像6)、黄色いものが何なのかという。



画像6

メラン) 応募の時に、直近何カ月以内に撮影した写真を添付してくださいって言われていたんですけど、私、直近で撮った写真というのがこれくらいしか思いつかなくて。岩本さんに、黄色い物は何を持っているんですかと聞かれたんです。私、大学駅伝とかがすごく好きで、よく応援に行くんですけど。駅伝の時に引かれている規制線なんです。それを県警の方に引っこ抜いていいですかと聞いて、そしたら県警の方がいいよと言ってくださって、引っこ抜いてきました。駅伝のための規制線を私が抱えているところを母が撮ってくれました。

夢のなかで、私はアルバイトをよくしているんですけど。その時は流れ星を引っこ抜いています。引っこ抜くのが癖で、無性に引っこ抜きたい時があります。

橘) この規制線も制作に使われているんですよね？

メラン) 去年滞在していたところで、引っこ抜いた流れ星の尾ということで制作に出て来ました。高松でも引っこ抜いたものがあるので、ちょっと繋がるかもしれないです。

橘) ありがとうございます。

(本記録は、アーティスト・トーク「高松で制作中のあれこれ」の内容を書き起こし、編集したものです。)